



ISS Comparative Regionalism Project

C R E P

<http://project.iss.u-tokyo.ac.jp/crep>

日韓の若者におけるナショナリズムと雇用・教育

CREP Seminar 15

本田 由紀

2006年11月21日

これは2006年11月21日のセミナーの口述記録を要約整理したものであり、

転載・引用等の利用は出来ません

CREP 地域主義比較プロジェクト

第15回月例公開セミナー

2006. 11. 21

本田由紀氏（東京大学社会科学研究所）

「日韓の若者におけるナショナリズムと雇用・教育」

司会 時間が来ましたので、そろそろ始めたいと思います。月例の CREP のセミナーです。今日は、本田さんに「日韓の若者におけるナショナリズムと雇用・教育」というテーマでお話を伺います。1時間くらい話していただき、あとは質疑応答ということにしたいと思います。

本田 今日は報告の機会を与えてくださり、ありがとうございます。自分が日頃やっている国内の若者の学校教育や雇用の問題をナショナリズムとどう接合すればいいのかかなり苦しみましたが、なんとか落としどころを見つけ、これならデータも少しあるということで「日韓の若者におけるナショナリズムと雇用・教育」というテーマで今日はやってみようと思いました。しかし、これまであまりナショナリズムについて正面から研究したことがなかったため、今日に至るまで慌てて行き当たりばつりに文献を乱読してみたりしたような次第です。穴や不足な点も多いと思いますので、その辺は忌憚なくご指摘いただければと思います。

お手元に、ワードのレジюмеとパワーポイントで映し出す図表のプリントアウトがあると思います。レジюмеにそっていきますので、ご覧いただきながら聞いていただければと思います。

1. 前提

最初に、この報告の前提です。非常に素朴な前提ですが、もし仮にこれから「東アジア共同体」の形成ということが成り立って進んでいくとすれば、それにとって最大の障害となるのは、各国間のナショナリズムの相克であると考えられます。特に、韓国や中国の対日的反発やそれを煽るように働いている日本国内のナショナリズムの勃興というのは、経済的な連携を阻害したり、経済的連携とは別の次元で東アジア内部の政治的対立を温存或いは悪化させたりすることにもなるかもしれません。それならば、各国のナショナリズム、

特にしばしばその急進的な担い手となる若者層のナショナリズムというものは、いかなる論理に支えられているかということを知り、その論理をやがては解体していくということが課題となっていくと考えられます。

このような前提の下に、今までどのようなことが言われてきたのかについて、皆様もよくご存じの点が多いかもしれませんが、一応ざっと振り返っておきたいと思います。これも本当に目に付いた文献を取り上げただけですので、何か重要なものが落ちていたりするかもしれません。それについてもご指摘いただければと思います。

2. 現代日韓のナショナリズムに関する様々な指摘

最近、社研内の平石(直昭)先生が『社会科学研究』に書かれた「現代日本の『ナショナリズム』一何が問われているか」という論考を大変面白く読ませていただきました。そこで書かれていたのは、現代日本のナショナリズムの歴史的な起源とその輻輳性のようなものであると思います。大変豊かな中身を思い切って凝縮した中身がそこにまとめてあります。要するに、日本の敗戦後の「第三の開国」というものは、冷戦下において非常に不十分なものに終わってきた。冷戦後の今こそが、真の「開国」状況にある。つまり、他の国との間の経済と庶民交流のグローバル化が生じている中で、本当に今「開国」ということに直面しなければならない状況にある。

しかし、実際には日本は「示すべき己がない」あるいは「顔も心もないただの産業マシン」としてこれまで戦後を過ごしてきたので、アイデンティティーというものが喪失した状態にある。あるいは、そういうアイデンティティー喪失状態に対する対処として「経済大国」の次の国家目標として「政治大国」化が目指されており、その具体的な表れとして軍事力の増強とか「国際貢献」が今叫ばれている。また、今試みられようとしている「第三の開国」は、戦後の「第二の開国」と同様の「使い分け開国」になりかねない可能性が散見される。つまり、近代西洋で生まれた「民主主義」を統治形態としては有用と評価しながらも、文化や生活様式の面では日本固有の「来歴」に固執し、それを保持しようとする。そういう開国に今なろうとしているということです。

一方、論壇や大衆の中には「右傾化」「保守化」「反動化」の傾向というものが観察される。しかし、こういう傾向の契機というものは、世代によって異なるようだと言われている。例えば、八木秀次氏がオウム真理教に対し共感を持っていたことについて平石先生は指摘されていますし、あるいは中島岳志さんという方の、シラ

ケ・新人類世代と団塊ジュニア・ポスト団塊ジュニアの心性が、それぞれ現在の「右傾化」「保守化」「反動化」「ナショナリズム」をもたらしているという考察も、引いていらっしやいます。

要するに、このような平石先生の論考は、敗戦から冷戦へ、そして冷戦から冷戦終結へ、という対外関係の変動の中で日本国内の「ナショナリズム」を捉えようとしたものだと言えます。また、この担い手の世代として、世代、すなわち出生コホートに注目して、それぞれが生きてきた時代相というものが重要であると指摘していらっしやると言えます。

次に、香山リカさんの『ぶちナショナリズム症候群』という本の中で比較的重要な指摘があったと思いますので、見ておきたいと思います。この本の中で私が興味深いと思いましたが、社会階層によってナショナリズムの性質が異なるということです。つまり、「エリート層」およびそれと連続的な「中間層」が抱く屈託のない「ぶちナショナリズム」、言い換えれば“愛国ごっこ”のようなものと、香山さんは「ロー階層」という言葉を使っていらっしやるのですが、相対的に低い階層の者が巻き込まれる可能性のあるフランス型のラディカルなナショナリズム、つまり「自分の国の社会や知識階層に対する不満や批判の表明としての愛国」、或いは「移民を追い出せ、固有の文化を愛せ」というような形のもつと伝統に回帰するべきだ、というような形の愛国というものを香山リカさんは区別していて、今まではエリート層に追随していた中間層の地盤沈下が、このようなラディカルである種の危険性を含むナショナリズムというものを、今後増大させる可能性があるのではないかと、ということを指摘しています。社会階層によってナショナリズムの起源や性質が異なるということが、香山さんの指摘の中で注目すべき点だと思います。

次に触れておきたいのが、お隣の情報学環の北田（暁大）先生が昨年出された『嗤う日本の「ナショナリズム」』という非常に評判になった本です。世代とか時代相のようなものに注目しながら、過去との連続の中で1990～2000年代の若者における「ナショナリズム」を支えるメンタリティというようなものを指摘しているという点で興味深いと思います。

非常に簡単にまとめますと、北田さんは日本の1960～1970年代前半はきわめて強烈な政治的反省の時代であって、反省が極限の形態をとるまでに至っていたと指摘しています。例えば連合赤軍事件に典型例が見られるような、執拗な総括、自己否定せよ、自己反省せよ、時によっては自殺に追い込まれるほどまで自らを反省せよという、しかも政治的に反省せよ、というような考え方や発想というものが非常に色濃くあったのが、1960～1970年代前半だったわけです。しかし、政治運動の挫折というものを経験した後の1970年代半ば

から 1980 年代初頭にかけては、こういった 1960 年代的なるものに対して逆に反省が起こっていた。つまり、1960 年代のような極限化した反省への抵抗としての無反省、反省への反省としての無反省というような、非常にパラドキシカルな問題が、しかも消費へと傾斜しつつ生じるというわけです。その具体的な現れ方というのは、非常に消費社会的なアイロニズム、つまり何でもかんでもパロディ化して捉えるような動きとなって現れていたと北田さんは述べています。

ところが 80 年代になりますと、もはや 1960 年代というものは忘れられかけ始め、断絶というか、反省の対象としてさえ存在感が弱まるような時代になってきたわけです。そうなるまでには、反省への抵抗としての無反省だったものが、「抵抗として」というところが忘れられて、単なる無反省になってきたと。つまり、1960 年代への距離感を欠落させた、単に浮かれるような無反省、言い換えれば、消費社会的シニシズム、さらに言い換えれば、制度化されたアイロニーのようなものが 1980 年代の日本を支配していたというのです。

ところが、バブルが崩壊した 1990 年代から 2000 年代になると、無反省であることに對する反省として、今度はロマンティシズムというものが現れ始めます。もう無反省であることに飽きた。つまり、再び反省的であろうとするような時代になった。その結果現れてきたのがロマン主義的シニシズム、あるいは無反省への反省としてのロマン主義、その一環としての「ナショナリズム」であったと北田さんは言っています。

北田さんは、今ここにいる非常にプライベートな「私」が一举に世界に短絡するような形で生じる、現代の若者の中でのナショナリズムの現れ方の特徴を、やはり香山リカさんの『〈私〉の愛国心』という本を引きながら指摘していらっしゃいます。北田さんは、「ロマン主義的シニシズムの中で湧き上がってくる『ナショナリズム』は、歴史意識を欠くアドホックなものにすぎない『から』相手にする必要はないということもできるし、そうである『からこそ』危険なのだということもできる」というように指摘していらっしゃいます。

こういう北田さんの研究は、国内における「反省の形式」の連鎖の中で、現代の若者の「ナショナリズム」を「ロマン主義的シニシズム」の表れとして捉えるという、特徴的な主張だと思います。ある国の中でオートポイエティックに自己発展を遂げる自立性のようなものに注目した点で、大変面白いと思います。ただし、香山リカさんが指摘したような担い手層の分化、今の若者の中ではどういう層がそのようなロマン主義に染まりやすいの

かということに関しては、あまり丁寧に触れていられっらないように思いました。

もう一つ最近出た論考で注目しておくべきだと思いましたが、若くて元気のある東大の院生の方である高原基彰さんが書かれた『不安型ナショナリズムの時代―日韓中のネット世代が憎みあう本当の理由―』という大変刺激的な本です。この中身も見たいと思います。

高原さんは、今日が日中韓のナショナリズムの相克の時代であると言われているけれども、その「日中韓のナショナリズムの相克論」というのが、各国の国民が玉突き玉のように中までみっしりと詰まった同質的な国民性を形成しており、同質な硬い玉がお互いにぶつかり合う、かちかちとぶつかり合うような状況として、ナショナリズム相克論というものは論じられていると指摘します。そして、高原さんはそれに対して本当なのかという問いを突きつけます。

実際には各国のナショナリズムというものは、国民共通の目標としての高度成長イデオロギーの消失と、国民内部の立場の分裂・多元化をいびつに反映している。つまり、ナショナリズムというものは対外問題というよりも国内問題としてとらえるべきだと。しかも、ナショナリズムが国内においてばらばらな担い手によって抱かれるという、非常に複雑な状況が発生していると高原さんは述べています。

より具体的に言うと、日中韓では共通して、総中間層化・脱工業化の次段階としての社会流動化、つまり「官僚制」から「個人化」へ、「総中流」から「格差化」へ、「大量生産」から「高度消費社会化」への変化というものが生じている。その中で各国では、「高度成長型ナショナリズム」、つまり国家の発展や国民の統一感の醸成のために煽ったり鼓舞したりするような形で元気よく唱えられるようなナショナリズムと、「個人化」、「流動化」、「格差化」がもたらす不安が生み出すような「個別不安型ナショナリズム」が、分離しながら同時に存在していると高原さんは指摘しています。

日韓中のそれぞれのナショナリズムがどのように存在しているかということについて、共通の見方に基づき具体的に研究されているわけですがけれども、日本においては1990年代にこれまでの「会社主義」が破綻し、そのひずみのしわ寄せを受けている若者の不満の表出である嫌韓・嫌中や、ネット上で面白おかしく語られるような「趣味化されたナショナリズム」というものが観察されるとのことです。こういう嫌韓・嫌中とか「趣味化されたナショナリズム」は、いずれも「個別不安型ナショナリズム」の現れであるのだけれども、この「個別不安型ナショナリズム」は、自分たちを個別不安に陥れてきた対象、つまり本

来矛先を向けるべき会社主義的成長神話である「高度成長型ナショナリズム」と反発しあうというより、むしろ奇妙な同調というものが生じてしまっているのが日本の特徴であると高原さんは指摘しています。

一方、韓国においては若年層のナショナリズム—ここでは反日に注目していますが—に、三つの層が観察されます。その第一は、戦前から日本統治期まで遡る国内の開発主義と親日派の密接な関係に対する「抵抗民族主義」の立場からの、「真面目」な異議申し立てというもの。第二は、そこから反日というシンボリズムだけ抜き出し、戯画化して文化表現するよう趣味的なナショナリズムというもの。第三は、前二者、特に今主流となった革新派に対する反発から、むしろ保守的な立場に親近感を持つような層です。つまり、アンチ盧武鉉であるとか反北主義というのでしょうか、反北朝鮮主義という三つの層が入り混じる形で観察されると指摘されます。

中国に関しても、やはり反日デモの参加者を観察することによって三つの層が混在していたと指摘しています。第一は、学生を中心とした意識的な反日運動参加者。第二は、この第一の機会に乗かって遊び半分で参加した「中間層モブ」。第三は、やはり第一の機会に乗っかり不満を爆発させた出稼ぎ労働者や失業者。それぞれに異なる利害や思想に基づく三つの異なる層が、反日という点では連帯していたという状況があったと高原さんは指摘しています。

要するに高原さんは、中高年支配層が抱く旧来の「高度成長型ナショナリズム」と、そのしわ寄せとして社会流動化の真っ只中におかれた若年層が抱く「個別不安型ナショナリズム」を区別しているとともに、これらが他の国ではもう少し峻別されているのに対し、日本ではだだららと同調していることの危険性を指摘しています。高原さんのこの議論は若干わかりにくいところがありまして、若者層が抱く「個別不安型ナショナリズム」は、不安定層といいですか、生活にかなり困窮している若者を母体としがちであると同時に、「趣味的」な現れ方をするという点で、香山さんが指摘しているような二類型の性質をいずれも兼ね備えているようで、この辺はもう少し整理が可能であったのではないかと思います。

次に、今まで主に韓国や日本側について述べてきましたけれども、韓国人の日本観の変化ということについて石坂浩一さんという方の指摘がありましたので、簡単に紹介していきたいと思います。石坂さんによれば、1945年から1960年までは反日が「自明」であったのに対して、1962年から1982年までは政権が反日を抑制した時代でした。そのきっかけに

なっていたのは、国交正常化や朴正熙独裁政権の成立でした。1982年から1992年については、公然化した反日論と政府の克日論というものが絡み合った時期であり、イシューとして教科書問題や従軍慰安婦問題がありました。ところが、1993年から1997年くらいになって日本に経済的な陰りが見えてきますと、「とるに足らない日本」のイメージというものが韓国の中で肥大的になったと。その背景としては、金泳三政権下での韓国の経済成長というものが存在していました。1998年頃からは、互惠平等の未来志向と多様な交流が模索されつつあり、その背景には金大中政権、対日文化開放政策、日韓共同宣言などの成立があったと言っています。つまり、石坂浩一さんの指摘は両国内の政治・経済状況と両国間関係の絡み合いというものを整理したものであったといえます。

次に二つ紹介するものは、これまでのものとは少し毛色が変わっているのですが、いずれも高校生を対象にした大量の質問紙データに基づいて、日本の高校生のナショナリズムを類型化しながらその特徴を分析しようとしたものです。一つは大野（道夫）さんという方が、ベネッセの『モノグラフ・高校生』で行った分析です。大野さんは、ナショナリズムを次の四つに類型化しています。まず、日本も好きだけれども外国も好きという相互性志向、日本は嫌いでも外国は好きという外国志向、日本は好きだけれども外国は嫌いという自国志向、そして日本も外国も嫌いなゼロ志向という四つの類型で、それぞれの比率を出しています。

さらにそれぞれの担い手を分析した結果、日本も好きだけれども外国も好きだという相互性志向は、学校の先生とか授業が好きで、或いはこれまで旅行や人との出会いなどの経験が豊富な者ほど多かったということが指摘されています。国際試合での応援の際に「君が代」を斉唱することが良いとして支持する者は自国志向に多いけれども、日の丸の旗のペインティングやTシャツや「ニッポン」の連呼などの応援方法について自分もやりたいと支持する者は相互性志向で最も多くなっているとのことでした。

ここから先は類型化していませんけれども、日本の高校生は総じて国民が相互に移住することに対しては全体として全肯定的であって、一方で伝統文化は支持すると答えるものが多くなっています。また、通貨統合や日本の消滅についてはきわめて否定的ですが、非戦や戦争責任の自覚というものは非常に強いと。総合すると、高校生の大半は人的交流や文化の相互理解に重点を置く「ソフトなナショナリズム」と大野さんは言っています。

つまり、高校生のナショナリズムは全体として「ソフト」でありラディカルではないけれども、それは学校への適応性が高くエリート的な者で最も顕著でした。これは、香山さ

んが指摘するような「エリート層」における雰囲気、わーっと盛り上がって楽しむような「ぷちナショナリズム」や“愛国ごっこ”のようなものについての指摘を裏付ける結果であったと言えます。

次の研究は、金（明秀）さんという方による、やはり高校生のナショナリズムの分析です。金さんはナショナリズムと権威主義に関するクラスター分析の結果から、ナショナリズムにも権威主義に対しても強く肯定的であるような層を「上層一貫」と名づけ、さらにそれが「排外主義的ナショナリズム」であると位置づけます。「非一貫」層は、ナショナリズムについては強く肯定するが権威主義的ではないということで「異文化許容的ナショナリズム」を抱く層であると名づけています。また、「下層一貫」とはナショナリズムに対する意識も権威主義に対する支持も低い層であり、この「下層一貫」層を「民主的な反国家主義」と金さんは名づけています。

それぞれの担い手を高校生の中で分析しますと、学力水準が低い学校群ほど「排外主義的ナショナリズム」が多いという結果は普通科・職業科共通に見られるのですが、逆に学力水準が比較的高い層についてみると普通科では「異文化許容的ナショナリズム」、職業科では「民主的な反国家主義」というものが多くなっています。

つまり、普通科のフォーマルな学校文化というものは、「異文化許容的ナショナリズム」と親和性が高く、職業科のフォーマルな学校文化、つまり金さんによれば、職人文化のような自立的で脱権威的な文化というものは、「民主的な反国家主義」と親和性が強いということがこの分析の結論です。

これまでの類型化と比べると、「民主的な反国家主義」というアンチナショナリズムの存在を指摘、設定している点が独自の分析だと思います。他の「異文化許容的ナショナリズム」と「排外主義的ナショナリズム」の担い手については、エリート的な層は異文化許容的であるのに対し、低階層は排外主義的であるというのは香山さんの指摘を裏付ける結果であるといえます。

以上、これまでに目に付いた議論をいくつか見てきますと、非常に単純なインプリケーションしか導いていないのですが、少なくとも二種類のナショナリズムを区別して考える必要があると思います。単純に自国を賛美し誇りを持つようなナショナリズムと、自国あるいは自分自身の現状への不満のはけ口としての他国への憎悪や「本来あるべき」架空の自国への希求として現れるようなナショナリズムです。諸指摘から見ると、自国内の社会的地位が高い者ほど前者の単純でシンプルな誇りとしてのナショナリズムを持ち、階層的

に地位が低い者ほど他国への憎悪を含むようなナショナリズムを持つ傾向があると考えられると思います。

3. 仮説

データ分析に入っていく際に、いくつかの仮説をあらかじめ設定し、それをデータで確かめるというプロセスをとりたいと思います。具体的に作った仮説は七つあります。第一は、ナショナリズム強化仮説。つまり、日韓の若年層のナショナリズム意識は趨勢として高まっているという仮説です。第二は、ナショナリズム類型仮説。つまり、日韓の若年層には自国の現状に肯定的なナショナリズム意識と、否定的あるいは不満に基づくようなナショナリズム意識が観察されるであろうという仮説です。第三は、憂国→排外仮説。これは、日韓の若年層において自国の現状に否定的なナショナリズム意識を持つ若者は、同時に他国に対しても攻撃的もしくは否定的である傾向があるのではないかというものです。第四は、雇用リスク仮説。日韓の若年層の中でも、雇用リスクが高い層ほど自国の現状に否定的なナショナリズム意識が強いのではないかという仮説です。第五は、日韓の若年層の中で、学歴が高い層ほど自国の現状に肯定的なナショナリズム意識が強いであろうという学歴仮説です。次はやや飛躍するのですが、趣味的とかモブとかいう話もありましたので、第六にインターネット仮説というのを立ててみました。日韓の若年層の中で、インターネットを利用している層はナショナリズム意識が高いけれども、その中には現状肯定的なナショナリズムと否定的なナショナリズム意識が混在しているかもしれないということです。第七は、高原さんが個人化不安や流動化不安による不安型ナショナリズムというものがあると指摘されていたので、日韓の若年層の中でアイデンティティー不安が強い層ほどナショナリズム意識が強いという仮説も立ててみました。

4. データ

これから使うデータは、第7回世界青年意識調査というものです。実施時期は2003年の2月から6月で、実施対象は日本、韓国、アメリカ、スウェーデン、ドイツの5カ国、そのうちの18歳から24歳の青少年各国約1,000名が対象となっています。

ちなみに、過去の世界青年意識調査は1970年代から6回にわたってほぼ5年ごとに実施されてきました。調査内容や調査対象国には若干の変動がありますが、継続的に使われている質問もありますし、韓国は第3回以降の全ての調査において対象国に含まれて

きました。以下では、このデータに含まれている 5 カ国、或いははその中で日韓 2 カ国に特に焦点をあてて分析をおこなってみたいと思います。

5. 分析結果

① ナショナリズム強化仮説

パワーポイントの図表をお手元にもお配りしておりますけれども、色分けして示してあるほうが見やすいと思いますので、ここから先は前を見てくださいのほうがわかりやすいかと思います。

まず、ナショナリズム強化仮説を検証するために「自国人であることに誇りをもっている」と「自国のために役立つと思うようなことをしたい」を、ナショナリズム意識に関する基本二項目として選びました。この二つの質問項目における時系列的な変化を過去の調査を追いながら見てみたものです。こう見ますと、全体的になだらかです。日本ではバブル経済の 1993 年頃に、いずれも肯定する回答がやや増える傾向があります。こちら（図 1）は緩やかで、こちら（図 2）のほうがよりはっきりしています。1993 年に上がって、1998 年と 2003 年の調査では高止まりしてしまっていたので、そういう意味では 1980 年代と比べると上がっていると言えるかもしれませんが、2000 年代に入って上がっているような傾向は見られないと言えます。アメリカでは 1998 年にぐっと下がっていますし、韓国もそれぞれが強まっているというよりも、むしろ低下傾向にあります。

こう見ますと、この両項目及びいずれの国についても近年特にナショナリズムは高まっているようには見受けられない。つまり、ナショナリズム強化仮説というのは、おそらく否定されそうであると言えます。

しかし、ここで参考資料として「日本について思うこと」という質問項目をやはり 1993 年、1998 年、2003 年と比べてみるができますので、その変化を見てみました（図 3）。そうすると、「日本について思うこと」として例えば良い政治が行われているとか、経済的に豊かであるとかいうことに関して、韓国では良い政治について比率が著しく落ちていきます。また、経済的に豊かという点に関しては、日本と韓国のいずれの国の若者の中でもそれを肯定する人の比率が下がっていますので、こういう政治経済的面上において日本のプレゼンスというのはこの間に明らかに低下したと言えます。

一方、文化・芸術面では日本及び韓国の若者のいずれについても、この間に優れた文化・芸術があると答える比率が高まっていますので、この面でのプレゼンスはやはり上昇して

いるといえます。余談ですけれども、途上国援助や地球環境問題や平和貢献などについては、日本の若者の中でやや上がっている傾向があります。特に、途上国援助があがっているのですが、韓国の若者についてはいずれも日本に対する評価が低下している。そういう点では、プレゼンスは下がっているといえると思います。

こうしてみますと、先ほど石坂浩一さんが指摘していらした「とるに足らない日本」という時期を1990年代に経て、今は文化交流が前面化しているということについては、こういう変化からも裏づけが得られていると思います。

② ナショナリズム類型仮説

次に、ナショナリズム類型仮説というものに進みます。まずお手元のレジュメにもう一度目を落としていただいて、5ページの下のところの「②【ナショナリズム類型仮説】」というのを見ていただきたいと思います。

ここでは、ナショナリズムを次の四つに類型化して捉えることにしました。縦軸として、ナショナリズム意識があるかないかというところでまず区分し、続いて自国の社会に満足しているか或いは不満を抱いているかという点で区別してみました。この二軸の組み合わせから、自国の社会に満足をしていてナショナリズムの意識を持っている層、不満でありながらナショナリズムの意識を持っている層、不満でありかつナショナリズム意識を持っていない層、満足しながらナショナリズム意識を持っていない層、という四つのナショナリズム類型を区別できます。

その分布を国別に示したのが、図4です。これを見ると、国によってかなり分布が異なっているということが一見してわかっていただけるかと思います。似ているのがアメリカとスウェーデンですが、この両国ではナショナリズム意識を持つ者が全体の6割を超えていまして、さらにその中で満足ナショナリズムというのが大半を占めているということがわかります。一方、それとかなり相反するような傾向を示しているのがドイツです。ドイツでは、ナショナリズム意識を持つ者がそもそも少ない。5カ国中でいちばん下です。しかも、ナショナリズム意識を持つ者の過半数が不満を持ちながらのナショナリズム意識を持つ層によって占められている。一方、韓国はナショナリズム意識を持つ層は5カ国の中で最も高いです。満足と不満を合わせて、ナショナリズム意識を持つという層の合計は5カ国中最も多いのですけれども、そのナショナリズムをもつ層の中で国に対して不満を持ちながらナショナリズムを持っている層というのが半数以上を占めている。しかも、若者全

体の中でこういう不満ナショナリズムを抱く層というのが占める比率というのも 4 割を超えていまして、5 カ国中最も多いということが非常に特徴的であるといえます。日本は5 カ国の中でかなり特徴が薄いほうですけれども、位置づけるとすればドイツと韓国の中間的な場所にあると言えます。ナショナリズム意識を持つ者の中では、韓国やドイツと同様に不満ナショナリズムを持つ層が過半数を占めています。

レジュメに戻っていただきたいのですが、6 ページの半分から上を見ていただきますと、国別に位置づけ直した図があります。ナショナリズム意識を持つ者が多いか少ないかを縦軸にとり、その中で「満足ナショナリズム」が多いのか「不満ナショナリズム」が多いのかを横軸にとってみました。アメリカとスウェーデンは、ナショナリズム意識も強い上に「満足ナショナリズム」が多いという点で、呼び方としていいかどうかわかりませんが、単純でシンプルな「愛国」意識を持つ人が多い。それに対して、韓国ではナショナリズム意識を持つ層の比重は高いのだけれども、不満を持ちながらのナショナリズム意識が強いということで、いわば「憂国」と呼んで良いような意識が若者の中はかなり強く見られます。一方、日本とドイツはナショナリズム意識が相対的に少なく、少なくといっても日本は半数ですけれども、その中で「不満ナショナリズム」が多いということから、言葉としていいかどうかわかりませんが「嫌国」というような意識を持つ若者が相対的に多いのではないかといえます。

こうしてみると、先の大戦で負けた日本とドイツは同じ象限にいるのですが、国によって若者の中でのナショナリズム意識の構成がかなり異なるということも、興味深い知見かと思えます。

次に、各国のナショナリズム類型別に「自国が誇れるもの」として何を挙げているか、ということをも日本と韓国だけについて示したものが図 5 と図 6 です。図 5 が日本、図 6 が韓国です。まず日本について、若者の中でのナショナリズム類型から、自国が何を誇れると思っているかについて細かく見てみますと、その中でも特に「満足ナショナリズム」と「不満ナショナリズム」、左側二つの違いに注目してみますと、両者は歴史や文化遺産、自然・天然資源、文化・芸術、科学技術などについてはほとんど誇れるものとして挙げる率に差がないのですけれども、生活水準や教育水準、治安、自由と平和、安定性などより具体的な個々人の生活にかかわる面では、明らかにその「不満ナショナリズム」が誇れるものとして挙げる比率が低くなっています。

一方、韓国ではやや異なる傾向が見出されまして、韓国では日本と比べて歴史や文化遺

産と国民一体性の水準が全体として顕著に高いということが一つ重要です。「満足ナショナリズム」と「不満ナショナリズム」を比べますと、その差が押しなべて大きくないのですが、自然や天然資源、文化・芸術など国全体に及ぶ特徴については、むしろ「不満ナショナリズム」のほうが低くなっているということが見出されます。つまり、同じナショナリズム類型であっても、日本の「不満ナショナリズム」は自分自身の生活条件の厳しさを実感しながら、国全体としての文化や自然には誇りを抱いている層であるのに対して、韓国の「不満ナショナリズム」は自分の個人的な生活状況の不満に基づいているというよりも、どうも国のあり方に対する客観的な不満を抱いている層としての性格が強いようだというところを、こういう分析から推測することができます。

③ 憂国→排外仮説

では次に、三つ目の憂国→排外仮説について見てみます。「不満ナショナリズム」を抱く層ほど他国に対して排外的である、という仮説の検証を試みようとしたのですが、実はこれはデータに限界がありましてなかなかうまくいきません。というのも、かろうじて使ったのが日本以外の4カ国に対して、「あなたは日本人について、次のことがあてはまると思いますか」ということについていくつも挙げて聞いていまして、その中に、「日本人は横柄」とか「日本人は信頼できない」とかいう項目も含まれていましたので、それらが一応「日本嫌い」と呼んでいい項目かと思いき、そう答える比率に差があるかどうかを見てみたのです。ちなみにほかの項目としては、勤勉・知的、見栄っ張り、寛大、勇敢、礼儀正しい、進歩的、平和愛好的などがあり、それらと並んで、横柄とか信頼できないという項目もあるので、これを使って他の4カ国が日本をどう思っているかについて一応分析ができるのですが、日本の若者が各国をどう思っているのかについての質問項目が含まれておらず、全く分析ができないという点で、非常に限界があるわけです。

それでもできる範囲でやってみたいと思い、ナショナリズム類型によって「横柄」とか「日本人は信頼できない」と答える比率に4カ国の間で差があるかどうかを見てみると、ほとんど差はないのですが、唯一相対的な有意差が見出されたのはドイツでした。ドイツでは、自国に満足しているほうが「日本人は横柄」と答える比率が高くなっていて、「不満ナショナリズム」が「日本人は横柄」と答えるような傾向に結びついているかということ、むしろ逆であるという結果が出てきました。

つまり、「不満ナショナリズム」が他国に対して排外的な意識を生み出しているような仮

説は否定される。今回の本当に情けないデータから見た範囲ではありますけれども、否定されるといえると思います。

④ 雇用リスク仮説

四つ目の仮説は雇用リスク仮説です。雇用リスク仮説に行く前に、参考データとして若年失業率の推移を示した国について OECD のデータから表したものがこのグラフです。こうしてみると、元々日本とドイツはきわめて若年失業率が低かったのですけれども、それがみるみる上がってきていまして、今回の分析に含まれているアメリカ、ドイツ、韓国、日本は、スウェーデンは含まれていないのですけれども、大体 10%前後のところではほとんど収斂するような状態になっています。

これを踏まえた上で、各国の就労状態とナショナリズム類型の関係を示したものが図 8 です。上が日本、下が韓国です。日本についてみると、まず「満足ナショナリズム」というのがいちばん多いのは、アルバイトなし学生、つまり裕福な学生は 28.1%で最も多くなっています。失業中の若者では、「満足ナショナリズム」は最も少なくなっています。しかし、このように「満足ナショナリズム」にはやや差がありますけれども、「不満ナショナリズム」については、すべての就労状態ではほとんど大きな差が見出されません。差が見出されるのは、パートタイム就労者、失業者、無職で、「不満アンチナショナリズム」つまり不満を持ちつつナショナリズムを持っていない人の比率が、4 割を超えて大変多くなっており、つまり、日本では雇用リスクというものは、「不満ナショナリズム」をもたらすというよりも、むしろ「不満アンチナショナリズム」意識をもたらしている傾向が強いです。

同じように韓国について見ますと、パートタイムで「満足ナショナリズム」が最も少なくなっていて、パートタイム及び学生で「不満アンチナショナリズム」が 4 割を超えて多くなっています。フルタイム就労者は、「アンチナショナリズム」がやや多い傾向が見出されます。30%ですので、少しですが多い傾向があります。失業者には明確な特徴は見出されません。つまり韓国では、パートタイムには雇用リスク仮説が当てはまりますけれども、同時に「不満アンチナショナリズム」はまだ就労していない学生でも強いということも韓国の大きな特徴であるといえます。

他の国についても少し述べておきますと、アメリカでは雇用リスク仮説がかなり当てはまるような結果が出てきました。フルタイム就労者で「満足ナショナリズム」が最も多く、

パートタイム、アルバイト学生、無職で「不満ナショナリズム」が比較的多い。失業者と無職では「不満アンチナショナリズム」がやや多くなっている。

スウェーデンでは、「満足ナショナリズム」はパートタイムでむしろ多くなっていて、失業者で明らかに少なくなっています。失業者で「不満ナショナリズム」と「不満アンチナショナリズム」が目立って多くなっています。つまり、スウェーデンのパートタイマーは、不満を抱きにくいという結果が出ていて、その点では他の国と違っているといえます。スウェーデンでは、雇用リスク仮説は失業してしまっている人には当てはまるけれども、パートタイムで働いている人については当てはまらないとも言えます。ドイツでは有意差が見出されませんでした。

このように、雇用リスク仮説が当てはまる対象や当てはまる度合いというものは国によって異なりますけれども、多くの国において部分的にはそれぞれ当てはまっている面が観察されます。ただし、日本の雇用リスクが高い層はアンチナショナリズムを抱きがちだということも注目すべき点だと思います。

⑤ 学歴仮説

次に学歴仮説に進みます。やはり日韓について、離学者、学校を出た人だけに対するサンプルに限定して、最終学歴とナショナリズム類型の関係を見たものがこの図です(図9)。日本では有意差が見出されていませんが、韓国は、かなり強い有意差が見出されています。日本では有意差はないのですが、学歴が低い人のほうが「不満ナショナリズム」及び「不満アンチナショナリズム」がやや多くなる傾向が見出されます。「満足ナショナリズム」には、学歴による差はそれほど一貫した傾向は顕著ではありません。

一方、韓国で「満足ナショナリズム」が明らかに多いのは4年生大学の卒業者と一般系高校の卒業者です。「不満ナショナリズム」は、専門大学で明らかに多くなっていて、実業系高校では「不満アンチナショナリズム」が目立って多くなっています。ちなみに韓国の専門大学というのは、2年制ないし3年制の実業教育に力点を置く教育機関であって、日本の専門学校に近いといわれています。就職率はむしろ4年制大学よりも高いのですが、就職先が中小企業に偏るなどの点で相違があると言われていています。この韓国の実業系高校で、「不満アンチナショナリズム」類型が多いということは、先ほど出てきた文献中で、金さんという方が指摘していらした、日本の職業高校において「民主的な反国家主義」というナショナリズムを抱かないという層が多かった、ということ思い出させる結

果となっていました。

参考として他の国について見てみますと、やはりアメリカで学歴仮説がかなり当てはまる面が見られまして、総じて学歴が高くなるほど「満足ナショナリズム」の比率が高く、逆に学歴が低い者に「不満ナショナリズム」が多くなっていました。スウェーデンとドイツでは有意差が見られませんでした。

つまり、学歴仮説の当てはまり方というのは、国によって異なると言えます。最も当てはまるのはアメリカで、日本では弱いのですが、韓国では学歴の水準の高さということと、一般的高校から4年制大学というこの一般系の軸と、実業系高校から専門大学につながる実業系の軸というものが交錯して、ナショナリズム類型の分布がより複雑になっているということがわかります。

⑥ インターネット仮説

パワーポイントの利用はここまでです。あとはあまり興味深い結果でもなかったもので、図表ではなくレジメだけで示してあります。続いてインターネット仮説、つまり休日のインターネット・パソコン利用とナショナリズム類型の関係をみますと、アメリカ、スウェーデン、日本では有意差はありませんでしたが、ドイツと韓国で少し興味深い結果が出てきました。ドイツでは、インターネット利用者のほうが非利用者に比べて「満足ナショナリズム」「不満ナショナリズム」のいずれも多くなっていました。ちなみに、「不満ナショナリズム」の次にそれぞれ16.2、19.8と書いてありますが、これは逆です。ごめんなさい。間違えました。利用者が19.8%で、非利用者が16.2%です。「満足ナショナリズム」と「不満ナショナリズム」、利用者のほうが多いことがわかりました。韓国では、インターネット利用者のほうが非利用者に比べて「満足ナショナリズム」が少なく、「不満ナショナリズム」が多くなる傾向が見られました。

つまり、ドイツでは満足であれ不満であれ、ナショナリズムを抱く層は利用者のほうが多い。韓国では、インターネット利用者において「不満ナショナリズム」が多くなっているということで、国によってはインターネットがナショナリズム全般、あるいはその中で特定のナショナリズム類型の層が集まる場、ないしそれらを煽ったり温床となる場になっている可能性があると考えられます。

⑦ 個人化不安仮説

最後の個人化不安仮説というのは、自分がどんな人間かわからなくなることがあるかど

うか、という度合いとナショナリズム類型の関係を見たものです。ドイツやスウェーデンでは、自分がどんな人間かわからなくなることがある者において「不満ナショナリズム」がやや多くなっていました。韓国では、そういう経験がない者ほど「満足ナショナリズム」がやや多く、そういう経験がある、又はたまにどういう人間かわからなくなることがある人の場合は、「不満アンチナショナリズム」のほうが多くなっていました。日本とアメリカでは有意差が見出されませんでした。国によっては、個人化不安仮説が弱いですがけれどもややあてはまる場合もあるといえるかもしれないと思います。

6. まとめ

以上、ざっとデータの分析結果を見てきたわけですが、その結果をまとめ直してみますと、日韓の若者のナショナリズムというものは、全体としてそれほど危険なほど高まっているわけではなく、現状に対する不満というものが排外的で急進的なナショナリズムをもたらしているというわけでも今のところはないようでした。

日本についていえば、現状つまり特に自分の個人的な生活状況に不満を持ちながらも、国全体としての文化や自然の面ではナショナリズム意識を抱いている層の比率、つまり不満ナショナリズムの層の比率は、今回の対象国の中では相対的にはやや多い比重を占めていました。しかし、雇用リスクがもたらす不満というものは、むしろナショナリズムではない方向に向かっていますし、インターネット利用や個人化不安とナショナリズムが連動しているという傾向も観察されませんでした。学歴についても、それが不利な層において不満を持ちながらのナショナリズムにつながりがちな弱い傾向があるとはいえ、それほど統計的に意味のある結果ではない。つまり、日本についてはそれぞれの意識の母体というのがあまりはっきりしないということが言えます。

一方、韓国については自分個人というよりも、国のあり方全体に不満を持ちながらのナショナリズム意識を持つ者が4割と非常に多く、対象国の中で突出して高い比重を占めています。その担い手となりやすいのは、パートタイム就労者、学生、専門大学の出身者であるといえます。インターネットがそうした意識の土壌となっている様子もやや伺えますし、個人化がもたらす不安とも弱いに関連しているということが出ていました。

今回の分析では、「満足ナショナリズム」と「不満ナショナリズム」のそれぞれの「危険性」に関する相違というものは、データの限界もあって明らかではありません。しかし、もしこれまで香山リカさんや大野さんが指摘されているように「満足ナショナリズム」と

いうもののほうがより交際協調的で危険性が少なく、「不満ナショナリズム」のほうがラディカルな排外に向かいやすいとすれば、「不満ナショナリズム」に対してより警戒していく必要があるといえるかもしれません。

そうであるとすれば、日本については、一部の若者が置かれている厳しい学歴格差や雇用不安というものを改善していくこと、また韓国についてもやはりそういう厳しい状況を改善するという同様の対策と共に、学生などが抱きやすい国内政治への「真面目な」不満ということに対して、韓国ではより配慮を払う必要があるのではないかと思います。以上です。

司会 ありがとうございます。それでは、自由に質疑応答をしていただけますか。いろいろ細かい部分について、僕も聞きたいことがあるのですが。

質問 1 ナショナリズムをどのように定義されているか、デモクラシーをどのような定義でお使いになっているのか、自分がどんな人間かわからなくなるというのはどういうことなのでしょう。また、ナショナリズムの高まりが危険かどうかという意味なのですが、これを危険と言ったり感じたりする人は一体誰なのでしょう。危険というのは誰にとって危険なのでしょう。

司会 言葉の定義について、三つ程質問があったと思います。

本田 平板な言葉に落としてその意識の一端を捉えようとする社会調査では、そこからうかがえる範囲でしか物が言えないため、そのような方法論そのものに限界があるのかもしれない。

質問 1 私は理論経済学者ですけれども、政治や哲学の中のナショナリズムやデモクラシーという言葉は私はかなり気にして使っています。普通、その文脈の中で皆が理解しようとしているのではないかと私は思います。

司会 僕もよくわかっていないのだと思うのですけれども、まずナショナリズム意識があるかどうかというのは、この後半部分のデータを用いた分析の中では図 2 の「自国のために役立つと思うようなことがしたい」という質問項目にイエスと答えた人が、ナショナリズム意識があるというふうに扱ったということですね。

本田 はい。

司会 わかりました。北田さんの『嗤う日本の「ナショナリズム」』では、ナショナリズムについて何か改めて定義がされているのでしょうか。それとも、こういう現象があるとい

うようにお書きになっているのでしょうか。また、これは若者に限った著書なのでしょうか。

本田 はい。若者に焦点を当てています。

司会 それぞれの時代における若者のナショナリズムの推移を見ているのでしょうか。

本田 ナショナリズムの話が出てくるのは現代のみ、つまり現代のロマン主義的な発想の一環としてナショナリズムがひとつの選択肢として出ているに過ぎないと言っています。

司会 それ以前の時代のナショナリズムはどうなっているのでしょうか。

本田 それについては、この本では大きなテーマになってきていません。

司会 そうですか。

本田 『GO』とか『凶器の桜』などの映画を素材にとりながら、今の若者の中に見られる日本への執着とか自分の延長線として国を捉える志向のようなものが、歴史的にどこから来ているのかということを追いかけています。

司会 つまり、それぞれの時代の若者の傾向を見る中で、とりあえず現代の若者のいろいろな現象の中にナショナリズムという要素が強く見られるのであって、過去の学生運動の時代などについてナショナリズムという言葉を用いて接近していないのですね。

本田 はい、そうです。

司会 わかりました。

質問2 「自国に対して役立つと思うようなことをしたい」というのをナショナリズムと呼ぶというお話がありましたけれども、これは一般的な定義なのでしょうか。

本田 そんなことはないと思います。

質問3 この質問では、自国のために何かをしたいかということ、役に立つことをしたいかという二つの質問が一緒になっていると思います。郷土意識があって、自分の郷土のためだけに役に立つことをしたいということ、外国や地球のために役に立つことをしたいというのは別だと思います。

本田 この質問の場合、前の項目と並んでいて続けて聞かれている。一つの質問の中で、(1)、(2)と連続して聞かれていますので、やはり自国ということに明らかに力点が置かれた項目です。役立ち感というよりも、自国のために貢献したいかということについての質問と捉えていただければと思います。

質問4 ナショナリズムをどのように一般的に定義すれば社会現象として有意につかまえられるかという問題と、社会調査で操作可能な定義に落とした時にどのような幅になるの

かという問題があると思います。今日の報告の中では、既存の調査を利用されているので、本田さんが自分にとって最も適切な操作可能な定義をしているわけではなく、既存の調査の中でどの調査項目を使うとナショナリズムということ的近似的には語られるか、ということだと思います。そういう意味では、最適であったかどうかということは別として、国際比較に耐えうるものに近い言葉遣いを選択されたと思います。

その上で二点ほどあります。一つは、6ページの真ん中の図で、ドイツはナショナリズムの意識が少ないと位置づけていらっしゃいますね。日本もそうで、敗戦国ではナショナリズムが少ないという解釈を示されていますが、その点がちょっと気になりました。ナショナリズムといった時、“nation”には国という意味と民族という意味があります。このデータで使われたのは、「自国のために役立つと思うようなことをしたい」ということですから、もっぱら国の方に志向した質問でナショナリズムというのが構成されているのですが、ひょっとするとドイツでは、ナショナリズムというのは国というよりも民族というレベルで現れている可能性があるのではないかと思います。そうすると、「自国のために役立つ」というような主体的なナショナリズムの傾向が捉えられず、民族的に違うということに関するような質問があれば、もう少しこのナショナリズムの指標みたいなものが高くなった可能性があると思います。この質問自体にこのことは含まれていないので、それはそれでやむをえないのですが、その点はもう少し慎重に検討し、設問に則して慎重な解釈を示したほうがいいのではないかなというのが第一点です。

二点目は、7ページのところの日本では雇用リスクがナショナリズムの傾向には影響を与えていないということ、つまりパートタイム・失業者・離職者といった雇用リスクの高い人たちには「不満ナショナリズム」ではなく、「不満アンチナショナリズム」が多かったという点が結果として面白いと思いました。質問は、本田さんがこれをどう解釈されるのかなという点です。こういう結果になったということ、どのように繋いで説明されるのかなということを知りたいと思いました。以上二点です。

本田 第一点目は、国という意味で聞くと反応が低いけれども、民族に対する愛着という点で聞けばもっと高く出てくるだろうということでしょうか。

質問4 ドイツは一般的にそうかもしれない。ナショナリズムという要素の中には、国家というコンポーネントと民族というコンポーネントが元々含まれていますから、それは一般化して説明する時にもう少しよく追った方がいいと思います。

本田 わかりました。

質問4 折れ線グラフの中でドイツが1993年に下がっているのは、1990年の統一により調査対象者の中に東ドイツの人間がおそらく入ってきたからではないかと思います。その上で、1993年に下がったということは無関係にドイツは一貫して低いと思います。

質問5 国家と民族に関連することですが、普遍的な価値に従って行動することが、結局は自国のために役立つと考えて行動する人もいるはずですよ。そういうのがナショナリズムの中に入るのかどうかというのがポイントになると思います。図1や2を普通の日本人に対して問うた場合、元々普遍的な価値の意識があまり強くないために、排外的なものや自国エゴの方に考えられやすいのですよね。ただ、そうではない可能性が入ってくると思います。ところが、この調査の項目自体としては非常に曖昧なところがあり、区別してよく考えないと問題が生じてしまうのではないかと思います。

司会 民主的かどうかというのは、本田さんの分析の中では用いられていないですが、平石先生の論文の中に出ていたのですね。

質問6 出てきます。ナショナリズムとデモクラシーというのは、フランスの大革命や市民革命の時にいわば表裏一体の形で出てきた、というのが念頭にあるものですから、そういう観点から見ると、僕の論文はナショナリズムそれ自体を否定するという観点には立っていません。ナショナリズムというものを、デモクラシーというものに基礎付ける形で本当に戦後の日本が展開してきたのかどうか、というのが私の論文の一つのポイントなので、それでそういう言葉は出てきます。

司会 データを用いた分析では、民主的か否かということは必ずしも必要ではないですよ。

本田 データ分析では、民主的かどうかというのは全く触れていません。

質問7 論点は二つあると思います。一つは、ナショナリズムというものをどう捉えるのかという前段の議論。二つは、このデータから何をどう読み取りどこまで言うのはリスクイなのかという後段の議論です。この二つは性格が違うと思います。私自身はどちらから話を進めていただいても結構ですが、それが混在しないようにした方が良いでしょう。

質問8 本田先生の仮説で唯一海外関係を関連させているのは、三番目の憂国→排外仮説で、他は海外関係ではなく国内のファクターを関連させている仮説ということになります。憂国→排外仮説はデータに限定があるため否定されているけれども、それなりに関連があるという話になっています。例えば、図3で見ると日本の平和貢献、途上国援助、地球環境問題へのかかわりについて聞かれている項目が、恐らくこの元の調査の中に入っている

のではないかと思います。そういうデータを使っても、ナショナリズムの在り様と海外関係の強化をクロスさせて分析することはできないのでしょうか。もしそういう項目があったら、出来そうかどうかという可能性をひとつお聞きしたいと思います。

また、アンケート調査にはアンケートの回答者の事実誤認や誤解の問題をどのように処理するのかという問題が残ると思います。というのも、日本の途上国援助について、図3では日本はよくやっているという評価が1993年、1998年、2003年と右上がりになっているということは、日本の若者が日本は途上国に対する援助でうまくやっているとか、それを若者は肯定的に評価していることだと思います。この間、例えば日本の途上国援助の金額が増えているわけでもないですし、対GDPも増えているわけではなくて、若者はなんとなく日本は外国でいいことをやっているだろうなという、期待に応えているという気がするというのがあって、実はそこには誤解があるような気がします。むしろ、韓国の人のほうが日本は景気が悪くなってから援助を減らしてけしからんという、客観的に正確な日本の認識をしているのかなとむしろ思ってしまったので、そういったアンケート調査に潜む誤解や誤認というファクターが非常に大きな分析の障害として存在していて、それを何か別のソースからの情報で修正したりすることが必要ではないかという気がします。18歳が常に同じように新聞を読みニュースを見ているわけではないですし、10年20年前に比べて18歳から24歳の人の新聞の購読率は随分下がっているように、私は学生の指導をしている限りは非常に感じるようになってきました。こういった分析をされる場合に、修正なり他からの分析をサポートすることを心がけているかな、という点を聞きたいと思っています。

本田 必要な場合はもちろんするのですけれども、若干マイナーな論点でしたので今回はそこまできちっとやっていませんでした。データ分析する場合、事実との関係を照らし合わせることはまったく珍しくないことです。ちなみに、この項目とナショナリズムタイプのクロスを分析していないなと今頃気がつきました。

質問8 そこをやったら何か面白い結果が導けるのかどうなのか。それともあまり関係がなさそうなのか。もしかしたら先の憂国→排外のように、ちょっとデータの的に全部の国がフォローされていないため、うまくデータ処理ができないかもしれない。

本田 これらの項目は全部日本を肯定的に評価する項目なのです。良い政治がおこなわれている、経済的に豊かだ、優れた文化・芸術がある、世界の平和に貢献している、発展途上国の援助に積極的に取り組んでいる、地球環境問題に積極的に取り組んでいるというような、日本を良く思う項目なのです。なので、そう答えないということは日本に対する反

発とまでは解釈できないという考えもあって、他の国から日本に対する反発・排外という点では使いませんでした。でも、確かにそれでもクロスはとっておくべきだったと思います。言えることもあったかもしれないと思います。

司会 すみません。これは日本について、日本と韓国の若者に聞いたわけなのでしょうか。

本田 5カ国全部に聞いています。

司会 例えば、韓国についてどう思いますかというような質問はないのでしょうか。

本田 ないのです。自国についてどう思いますか、という質問はあります。それぞれの国の人に、自分の国をどう思いますかとか、自国の社会に満足していますか、という質問はありますけれども、日本が韓国をどう思っているとか、日本がアメリカをどう思っているとか、アメリカが韓国をどう思っているか。クロス・マトリックスになるような質問は、複雑になりすぎるせいもあって聞かれていないのです。

質問9 日本のマスコミでのレベルでの議論だと、韓国や中国というのは愛国主義教育でナショナリズムを煽っていて、それに対して日本はやっていないと言われていています。正しいかどうかわかりませんが、例えばその安倍（晋三）総理が図2を見たら、やはり日韓は、収斂しているとはいえ、2割以上違いがあるので、教育基本法を改正しないと韓国に負けちゃうということを言いかねないかと思います。何が言いたいかという、教育の影響はどう考えられるのでしょうか。例えば、日本国内の中で愛国的な教育をやっている学校の卒業生と普通の学校の卒業生とか比べたらどういうふうになるのでしょうか。教育の影響について何らかのお考えがありますか。

本田 教育についてかろうじて触れているのはこの図しかないですけれども、学校によってどういう教育をやっているかで意識がどう違うかというような分析は、学校教育の中身ということを捕捉するのが非常に難しいために、少なくとも今回はできていないのです。例えば生徒に、あなたの学校ではこういうことをやっていますかと聞くくらいの手しかないかもしれませんが、それも誤情報である可能性もあります。学校に聞いて、学校の情報と生徒の愛国心とを照らし合わせるのが一番正確かもしれませんが、そこまでのことをやった分析というのは、今のところ私が目にした範囲ではありませんでした。

つまり、先ほども紹介した範囲であるのは、高校類型や教育機関類型です。それによって意識が違うということは、非常に大雑把ですが透けては見える。今、日本でも韓国でも、職業高校や職業・職人的なスキルに重きを置くところでは、ナショナリズム的な発想が低まるということが別の分析で共通に観察されましたので、興味深いとは思いますが、これも

非常に大雑把な議論ですけれども、愛国教育をやったからといって、愛国心が必ずしも高まるわけではないという議論も一方では根強くあります。戦前であれだけの教育をやっても、日本人はそれほど強い愛国心を持っていなかったということが言われていますから、教育と意識との間にそれ程ストレートな対応関係があるわけでもないとも思います。

質問9 このデータの限界かもしれないですが、直近の政策課題としてこの教育基本法が通ったら、図2の日本の回答は上がるのかどうか議論の余地があるのではないのでしょうか。私もおっしゃったことには気分的には賛成ですけれども、その辺についてももう少し実証が欲しいなと思いました。

質問10 今日お話にあったことを越えてしまう質問になってしまうかもしれませんが、ナショナリズムという概念を使ってしまうとよくわからなくなる面があるなと思いました。先ほど言われていたように、コスモポリタンの普遍的な価値に訴えて国際的に行動することが、自国のためになると考えて行動する人を析出するような調査というのはないのでしょうか。或いは、それを析出できるような調査方法というのはないのでしょうか。そういうのがどういう階層の人に多いかとかいうことがわかってくると、日韓はこれだけ喧嘩しているけれども、コスモポリタンの価値を使えば上手くいく、というような可能性も見えてくると思います。そういう情報はないのでしょうか。

本田 今回紹介している金さんという方の分析は、一定の工夫をしていると思います。彼は、日本人の活躍は誇らしい、日本人のためになることをしたい、日本人が悪く言われると腹が立つといった、ナショナリズムに関連すると彼がみなしている項目と、権威主義的パーソナリティというナチ研究以来の概念をもってきまして、権威ある人には従わなければならない、指導者や専門家には従わなければならない、以前からのやり方を守ることが最上の結果を生む、伝統や慣習には従うべきだ、というような権威に追従的なパーソナリティの項目を組み合わせ、両方を持っている人を排外主義的ナショナリズムと言っています。それを本当に排外主義と結びつけていいのか、という点については飛躍があると思いますが、権威に従わなければならないという発想は低いけれども、ナショナリズムを持って日本が好きだ、というような人を「異文化許容的ナショナリズム」と呼んでいます。このような工夫はなされたりしています。よりプリミティブな工夫をしているのは大野さんで、日本が好き、日本が好きじゃない、外国は好き、外国は好きでないということを組み合わせる志向性を区別しています。排外的な志向を表すようなワーディングを工夫してひとつ盛り込んでおけばできると思います。ただし、今回使ったデータではそのようなこ

とはされておらず、私が見える範囲でいいデータセットがありませんでした。

司会 専門がヨーロッパの僕は、ナショナリズムという言い方を使いたくないというか、歴史的には使えるけれども第二次大戦後に使うのはどうかと思います。移民排斥、排外主義、極右といったより具体的な問題にのせて使うことはあると思うのですが、ナショナリズムはいろいろと扱いが難しいので、分析のまとめの言葉としてやや使いづらいという感じがします。ユーロバロメーターの調査では、どこに一番アイデンティティーを感じますかという調査項目があり、国家、自分の国、地域、EU や EC といったサブナショナルな地域やコミュニティから選ぶようになっています。このように聞かれたら、自分はこれだというように答えられるので、ナショナルな意識ということになると思います。そして、ヨーロッパ的な意識の推移と実際の統合の進展とを比べることによって、ある程度地域主義に関連させる社会意識調査を生かせることができると思います。もちろん、このデータセットはそういうために作られたわけではないので、いろいろご苦労されているのはよくわかるのですが、やはり難しいかなという感じがしました。

質問 1 1 これは日本の政府がやったアンケート調査ですよ。例えば、日韓の若者がどのような対米意識を持っているか、というアメリカが行う調査項目をクロスさせることによって、本田さんが最初に言われたナショナリズムと東アジアの共同体形成における意識について何か見えてくるのではないかと思います。アメリカはどちらの国にも基地を持っているので、国民はアメリカを相当センシティブに考えているのではないかと思います。その辺りをよく見られたらいいのではないかなと思います。

あとやはり、メディアの問題が相当大きいという気がします。メディア、政治家、ナショナリズムというのは、非常にドメスティックな目的のために日韓関係や日韓問題を使っていると思いますし、メディアも取り上げ方に非常に本当にナショナリズムがあるという感じがしています。例えば、拉致の問題が日本のナショナリズムを高めるためにしばしば使われていますけれども、韓国で何人北朝鮮に拉致されたのかという報道を私は今まで一度も聞いたことがありません。また、西ドイツと東ドイツが分かっていた時に、ヨーロッパではやはり同じような問題があったと思うのですが、そういったことについて日本では全く報道されていなかったと思います。このような報道が、ナショナリズムの形成や方向性を非常に左右している気がします。そういった問題に関して、何か本田先生自身が考えておられることがあれば教えていただきたいと思います。

本田 この問題に踏み込むとすれば、膨大にやるべきことは残されていると思います。若

者のナショナリズムと国際関係、メディアの問題、政治家の問題などに入り始めると、ものすごく論点はたくさんあると思いますし、データも探せばあるのかもしれませんが。

質問 1 1 この調査の項目を使ってナショナリズムといった概念のラベルをつけるという点ですが、自国のために役立つと思うようなことをしたいか、という質問を使ってナショナリズム意識のある・なしを操作化されているわけですが、一旦ナショナリズム意識あり・なしというラベルをつけてしまうと、ナショナリズムがある・なしでこんなに違うのだという議論になってしまいます。ナショナリズムのあり・なしということと、自国に役に立つと思うか・思わないかということの間のギャップから、議論が拡散してしまう恐れがあるような気がしました。

本田 ありがとうございます。

質問 1 2 今初めて日本政府が主催してやった調査だということを知りました。そうだとすれば、こういう調査項目でこういう聞き方をしている意図やイデオロギー性をまず明らかにした上で、何が言えるかと考えないといけないと思います。

本田 世界青年意識調査は、なかなかない調査ということで評判もかなり良く、他の国でも言及されることが多いのです。

司会 そろそろ時間ですので、最後にしましょうか。質問やご意見はありませんか。

質問 1 3 僕は、自分の論文を書いた時にどのようなデータを使っていいか全然わからなかったもので、そういう意味では印象論でしかなかったわけです。なので、こういうデータを踏まえた議論をやってくれたということについては、非常に嬉しく思って、感謝しています。

司会 いろいろ面白い点があったご報告であったと思います。以上で終わります。本田さん、どうもありがとうございました。

(終了)

CREP セミナー報告 2006.11.21

日韓の若者におけるナショナリズムと雇用・教育

本田由紀（東京大学社会科学研究所助教授）

0. 前提

「東アジア共同体」の形成にとって最大の障害となるのは、各国間のナショナリズムの相克であろう。特に韓国や中国の対日的反発、またそれを煽るように働いている日本国内のナショナリズムの勃興は、経済的な連携を阻害したり、あるいは経済的連携とは別の時限で東アジア内部の対立を温存することになるだろう。

それならば、各国のナショナリズム、特にしばしばその急進的な担い手となる若者層のナショナリズムがいかなる論理に支えられているかを解剖し、その論理をやがては解体することが課題となるだろう。

1. 現代日韓のナショナリズムに関する様々な指摘

*現代日本のナショナリズムの起源と輻輳性（平石 2006）

敗戦後の「第三の開国」は冷戦下において不十分なものに終わる→「冷戦後の今こそ日本が、真の『開国』状況にある」（by 冷戦終結、経済と庶民交流のグローバル化）

しかし実際には

・「示すべき己がない」「顔も心もないただの産業マシン」としてのアイデンティティの喪失

あるいはそれへの対処としての

・「経済大国」の次の国家目標としての「政治大国」化（軍事力増強と「国際貢献」）

・「第二の開国」と同様の「使い分け開国」に＝近大西洋産の「民主主義」を統治形態としては有用と評価しつつ、文化や生活様式の面では日本固有の「来歴」を保持

・論壇や大衆の「右傾化」「保守化」「反動化」、but その契機は世代により異なる（ex.八木秀次のオウムに関する指摘、中島岳志のシラケ・新人類世代と団塊ジュニア・ポスト団塊ジュニアの心性に関する指摘）

★敗戦→冷戦→冷戦終結という対外関係の変動の中で「ナショナリズム」を捉える。担い手の世代＝生きてきた時代相への注目。

*社会階層によって異なるナショナリズム（香山 2002）

「エリート層」およびそれと連続的な「中間層」が抱く屈託のない「ぷちナショナリズム」（“愛国ごっこ”）と「ロー階層」が巻き込まれる可能性のあるフランス型のラディカルなナショナリズム（「自分の国の社会や知識階級に対する不満や批判の表明としての愛国」、「移民を追い出せ。固有の文化を愛せ。」）を区別、今後中間層の地盤沈下が後者を増大させる可能性。

★社会階層によって異質なナショナリズムを指摘。

*90～2000年代の若者における「ナショナリズム」を支える時代性の連鎖（北田 2005）

・60～70年代前半：政治的反省の時代、反省の極限化

・70年代半ば～80年代初頭：60年代的なるものへの反省の時代、60年代への抵抗としての無反省、消費社会的アイロニズム（パロディ化）

・80年代：60年代的なるものとの断絶の時代、抵抗としての無反省＝60年代への距離感を欠落させた無反省、消費社会的シニシズム（制度化されたアイロニー）

・90～2000年代：反省的であることを再び希求する時代、ロマン主義的シニシズム、無反省への反省としてのロマン主義、その一環としての「ナショナリズム」

「この私」と「世界」との短絡としてのナショナリズム＝「＜私＞の愛国心」（香山、2004）

「ロマン主義的シニシズムの中で湧き上がってくる「ナショナリズム」は、歴史意識を欠く限定的なものにすぎない「から」相手にする必要はない、ということもできるし、そうである「からこそ」危険なのだ、ということもできる。」（243頁）

★国内における「反省の形式」の連鎖の中で現代の「ナショナリズム」を「ロマン主義的シニシズム」の表れとして捉える。オートポイエティックな観点。担い手層の分化には触れず。

*日中韓各国における複数のナショナリズムの弁別（高原 2006）

「日中韓のナショナリズムの相克」論ー「玉突きモデル」（各国民の均質性を前提）

ほんとうか？ 実際には各国のナショナリズムは国民共通の目標としての高度成長イデオロギーの消失と、国民内部の立場の分裂・多元化をいびつに反映している＝ナショナリズムは対外問題というよりも国内問題。

日中韓に共通して、総中間層化・脱工業化の次段階として社会流動化（「官僚制」から「個人化」へ、総中流から格差化へ、大量生産から「高度消費社会化」への変化）が生じている。その中で各国では「高度成長型ナショナリズム」（国家の発展や国民の統一感の醸成のために要請される）と「個別不安型ナショナリズム」（「個人化」「流動化」「格差化」がもたらす不安から生まれる）が分離。

・日本ー「会社主義」の破綻・ひずみのしわよせを受ける若者の不満の表出である嫌韓・嫌中やネット上などでの「趣味化されたナショナリズム」（いずれも「個別不安型ナショナリズム」）が、本来矛先を向けるべき会社主義的成長神話としての「高度成長型ナショナリズム」と奇妙な同調。

・韓国ー若年層のナショナリズム（反日）における三つの層：①戦前・日本統治期まで遡る、国内の開発主義と親日派の密接な関係に対する「抵抗民族主義」の立場からの「真面目」な異議申し立て、②そこから反日というシンボルリズムだけ抜き出し戯画化して文化表現する動き、③前二者、特に主流となった革新派に対する反発から保守的な立場に親近感

をもつ層（含むアンチ盧武鉉、反北主義）

・中国一反日デモ参加者における三つの層：①学生を中心とした意識的な反日運動参加者、②①の機会に乗っかり遊び半分で参加した「中間層モブ」、③やはり①に乗っかり不満を爆発させた出稼ぎ労働者・失業者

★中高年支配層が抱く旧来の「高度成長型ナショナリズム」と、そのしわよせとして社会流動化のただ中におかれた若年層が抱く「個別不安型」ナショナリズムを区別、しかし日本ではそれらが同調してゆく危険性を指摘。後者は不安定層を母体としていると同時に「趣味的」である点で香山の2種類の性質を兼ね備える？

*韓国人の日本観の変化（石坂 2002）

- ・1945～1960：反日が「自明」だった時代
- ・1961～1982：政権が反日を抑制した時代←国交正常化、朴正熙独裁政権
- ・1982～1992：公然化した反日論と政府の克日←教科書問題・従軍慰安婦問題
- ・1993～1997：とるに足らない日本←金泳三政権下での韓国の経済成長
- ・1998～：互惠平等の未来志向と多様な交流←金大中政権、対日文化開放、日韓共同宣言

★両国内の政治・経済状況と両国間関係の絡み合いを指摘。

*高校生の「ソフトなナショナリズム」（大野 2003）

- ・相互性志向（日本好き・外国好き）40.3%、外国志向（日本嫌い・外国好き）31.8%、自国志向（日本好き・外国嫌い）8.4%、ゼロ志向（日本嫌い・外国嫌い）19.5%
- ・相互性志向は学校の先生や授業が好き、旅行や人との出会いなどの経験がある者ほど多い。
- ・国際試合での応援の際に「君が代」斉唱を支持する者は自国志向に多いが、日の丸の旗やペインティングやTシャツ、「ニッポン」の連呼などの応援方法を支持するものは相互性志向で最も多い。
- ・高校生は総じて相互移住には肯定的、伝統文化は支持、通貨統合や日本の消滅には否定的、非戦や戦争責任の自覚は強く支持。→人的交流や文化、相互理解に重点を置く「ソフトなナショナリズム」。

★高校生のナショナリズムは全体として「ソフト」だがそれは学校への適応性が高くエリート的な者で顕著。香山「エリート層」における「ぷちナショナリズム」を裏付ける。

*高校生のナショナリズムの3タイプと学校文化

- ・ナショナリズムと権威主義に関するクラスター分析結果
 - 「上層一貫」：「排外主義的ナショナリズム」47.1%
 - 「非一貫」：「異文化許容的ナショナリズム」25.3%
 - 「下層一貫」：「民主的な反国家主義」27.6%

・学力水準が低い学校群ほど「排外主義的ナショナリズム」が多く（普通科・職業科共通）、
「異文化許容的ナショナリズム」（普通科）ないし「民主的な反国家主義」（職業科）が少
ない。→普通科のフォーマルな学校文化は「異文化許容的ナショナリズム」と親和性が高
く、職業科のフォーマルな学校文化（職人文化のような自立的で脱権威的な文化）は「民
主的な反国家主義」と親和性が強い。

★「民主的な反国家主義」という第三の類型を設定している点が独自。他の二タイプにつ
いてはやはり香山の指摘を裏付ける。

→少なくとも二種類のナショナリズムを区別する必要がある。それは、単純に自国を賛美
し誇りをもつようなナショナリズムと、自国および自分自身の現状への不満がその捌け口
として他国への憎悪と「本来あるべき」架空の自国への希求として表れるナショナリズム
である。自国内での社会的地位が高い者ほど前者を、低い者ほど後者をもつ傾向があると
考えられる。

2. 仮説

①【ナショナリズム強化仮説】日韓の若年層のナショナリズム意識は趨勢として高まっ
ている。

②【ナショナリズム類型仮説】日韓の若年層において、自国の現状に肯定的なナショナ
リズム意識と否定的なナショナリズム意識が観察される。

③【憂国→排外仮説】日韓の若年層において、自国の現状に否定的なナショナリズム意
識をもつ若者は同時に他国に対して否定的である傾向がある。

④【雇用リスク仮説】日韓の若年層の中で、雇用リスクが高い層ほど自国の現状に否定的
なナショナリズム意識が強い。

⑤【学歴仮説】日韓の若年層の中で、学歴が高い層ほど自国の現状に肯定的なナショナ
リズム意識が強い。

⑥【インターネット仮説】日韓の若年層の中で、インターネットを利用している層の方が
ナショナリズム意識が高いが、その中には現状肯定的なナショナリズム意識と現状否定的な
ナショナリズム意識が混在している。

⑦【個人化不安仮説】日韓の若年層の中でアイデンティティ不安をもつ層ほどナショナリ
ズム意識が強い。

3. データ

第7回世界青年意識調査※

- ・ 実施時期：2003年2月～6月
- ・ 調査対象：日本、韓国、アメリカ、スウェーデン、ドイツの5カ国における18～24歳
の青少年、各国約1,000名

※過去の世界青年意識調査は第1回が1972年、第2回が1977年、第3回が1983年、第4回が1988年、第5回が1993年、第6回が1998年とほぼ5年ごとに実施されている。調査内容には若干の変動があるが、第2回調査以降は継続的に盛り込まれている項目もある。調査対象国にも入れ替えがあるが、第7回調査の対象5カ国の中で韓国以外は第1回以降、韓国は第3回以降、すべての調査において対象国に含まれている。

以下では、このデータに含まれる5カ国、あるいは日韓2カ国を適宜分析に用いる。

4. 分析結果

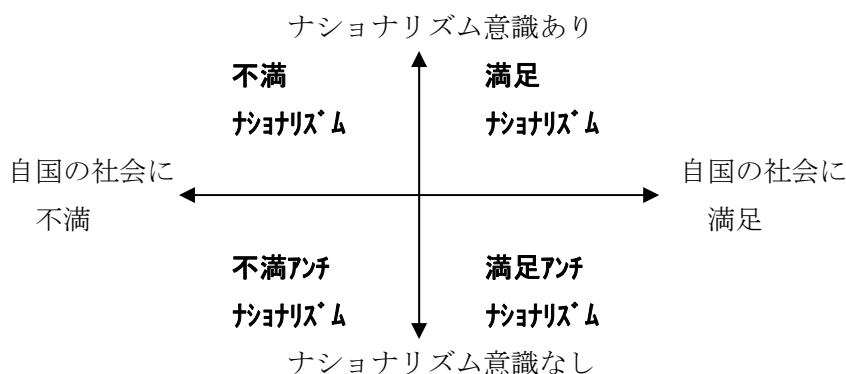
①【ナショナリズム強化仮説】

*ナショナリズム意識に関する基本2項目の時系列的変化(図1・図2):いずれの項目、いずれの国についても近年特にナショナリズムが高まっているわけではない。

→仮説は否定される。

* (参考)「日本について思うこと」の変化(図3):政治的・経済的プレゼンスの後退、文化・芸術面でのプレゼンスの上昇、世界的な貢献については国内での認識は高まるが韓国からの認識は低下。石坂の指摘する「とるにたらない日本」と文化交流の前面化を裏付け。

②【ナショナリズム類型仮説】



概念図1 ナショナリズムの類型化

- *国別ナショナリズム類型分布(図4、ナショナリズム意識としては図2の項目を使用):
- ・アメリカとスウェーデンでは、全体の6割を超えるナショナリズム意識をもつ者の中で「満足ナショナリズム」が大半を占める。
 - ・ドイツでは、ナショナリズム意識をもつ者の比率が5カ国中もっとも低く、しかもその

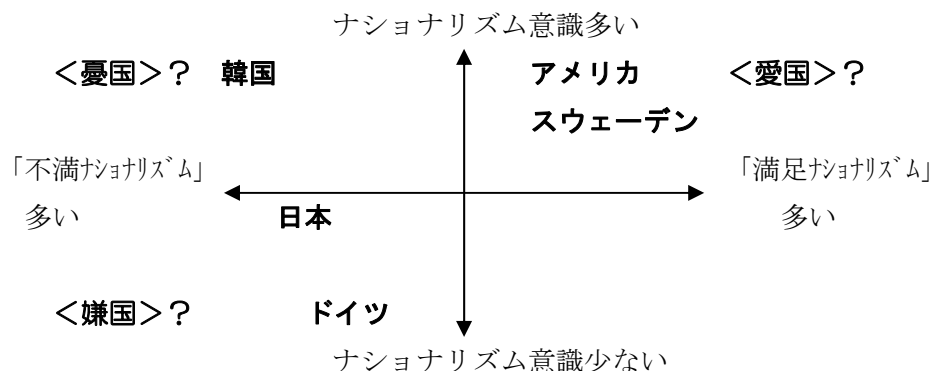
中の過半数は「不満ナショナリズム」が占める。

・韓国では、ナショナリズム意識をもつ者の比率は5カ国中もっとも高いが、やはりその中で「不満ナショナリズム」が過半数を占め、しかも若者全体の中でそれが占める比率も5カ国中もっとも大きい。

・日本はドイツと韓国の間間的な分布をもつ。ナショナリズム意識をもつ者の中ではやはり「不満ナショナリズム」が過半を占める。

↓

国別の位置づけ



概念図2 ナショナリズム類型分布における各国の位置づけ

*ナショナリズム類型別の「自国が誇れるもの」(日本・韓国、図5・図6)

・日本:「満足ナショナリズム」と「不満ナショナリズム」は、歴史・文化遺産、自然・天然資源、文化・芸術、科学技術などではほとんど差がないが、生活水準、教育水準、治安、自由と平和、安定性など、より具体的な生活にかかわる面では後者の水準が低い。

・韓国:日本と比べて歴史・文化遺産と国民一体性の水準が顕著に高い。「満足ナショナリズム」と「不満ナショナリズム」の差はおしなべて大きくないが、自然・天然資源や文化・芸術についてむしろ後者で低い。

↓

同じナショナリズム類型であっても、日本の「不満ナショナリズム」は自分自身の生活状況の厳しさを実感しつつ、国の文化や自然には誇りを抱いている層であるのに対し、韓国の「不満ナショナリズム」は自分の個人的な生活状況に基づいているというよりも、国のあり方に対する客観的な不満を抱いている層としての性格が強い。

③【憂国→排外仮説】

*日本以外の4カ国のナショナリズム類型によって「日本人は横柄」および「日本人は信頼できない」と答える比率に有意差があるかを検討→ドイツにおける「日本人は横柄」のみ有意差あり (p<0.01) (図7)、しかし「日本人は横柄」と答える比率はむしろ「満足ナ

シヨナリズム」と「満足アンチナシヨナリズム」において相対的に高い。

→仮説は否定される。(ただしデータに限定性あり)

※日本人の排外意識に関する質問項目が含まれていないため日本については分析できないことが大きな限界。

④【雇用リスク仮説】

日韓の就労状態とナシヨナリズム類型の関係（図8、いずれも $p < 0.05$ ）

・日本：「満足ナシヨナリズム」はアルバイトなし学生でもっとも多く、失業者でもっとも少ない。「不満ナシヨナリズム」には大きな差なし。パートタイム、失業者、無職で「不満アンチナシヨナリズム」が多い。＝雇用リスクは「不満ナシヨナリズム」ではなく「不満アンチナシヨナリズム」をもたらしている。

・韓国：パートタイムにおいて「満足ナシヨナリズム」がもっとも少なく、パートタイムおよび学生において「不満ナシヨナリズム」が多い。フルタイムはむしろ「不満アンチナシヨナリズム」がやや多い。失業者には明確な特徴なし。＝パートタイムについては雇用リスク仮説が当てはまるが、同時に「不満アンチナシヨナリズム」は学生の特徴でもある。

*参考（図表は省略）

・アメリカ：フルタイム就労者で「満足ナシヨナリズム」がもっとも多く、パートタイム、アルバイト学生、無職で「不満ナシヨナリズム」が比較的多い。失業者と無職では「不満アンチナシヨナリズム」がやや多い。 $(p < 0.05)$ ＝雇用リスク仮説がある程度当てはまる。

・スウェーデン：「満足ナシヨナリズム」はパートタイムでむしろ多く、失業者で明らかに少ない。失業者では「不満ナシヨナリズム」と「不満アンチナシヨナリズム」が目立って多い。 $(p < 0.05)$ ＝雇用リスク仮説は失業者についてはあてはまり、パートタイムについては当てはまらない。

・ドイツ：有意差なし。

↓

雇用リスク仮説があてはまる対象や度合いは国によって異なり、部分的にはあてはまるといえる。しかし日本については雇用リスクはむしろアンチナシヨナリズムと連動している。

⑤【学歴仮説】

日韓の離学者の最終学歴とナシヨナリズム類型の関係（図9、日本は有意差なし、韓国は $p < 0.01$ ）

・日本：有意ではないが、学歴が低い方が「不満ナシヨナリズム」および「不満アンチナ

ショナリズム」がやや多い。「満足ナショナリズム」には学歴による差が不明確。

・韓国：「満足ナショナリズム」は四年制大学および一般系高校で高い。「不満ナショナリズム」は専門大学で明らかに多く、実業系高校では「不満アンチナショナリズム」が目立って多い。 ※専門大学：2年制ないし3年制の実業教育に力点を置く教育機関であり、日本の専門学校に近い。就職率は四年制大学より高いが、就職先が中小企業に偏るなどの相違がある。

*参考（図表は省略）

・アメリカ：総じて学歴が高くなるほど「満足ナショナリズム」比率が高く、逆に学歴が低い者で「不満ナショナリズム」が多い。（ $p < 0.1$ ）

・スウェーデン、ドイツ：有意差なし。

↓

学歴仮説のあてはまり方は国によって異なる。もっともあてはまるのはアメリカ、日本では弱いがあてはまり、韓国では学歴と一般系／実業系が交錯してより複雑に。

⑥【インターネット仮説】

休日のインターネット・パソコン利用とナショナリズム類型の関係（図表は省略）

・アメリカ、スウェーデン、日本では有意差なし。

・ドイツではインターネット利用者の方が非利用者に比べて「満足ナショナリズム」（利用者 13.5%、非利用者 10.9%）、「不満ナショナリズム」（それぞれ 16.2%、19.8%）のいずれも多い。（ $p < 0.05$ ）

・韓国ではインターネット利用者の方が非利用者に比べて「満足ナショナリズム」が少なく（それぞれ 31.3%、34.1%）、「不満ナショナリズム」が多い（それぞれ 44.3%、36.6%）。

（ $p < 0.1$ ）

↓

国によってはインターネットがナショナリズムないしその特定の類型の集まる場、ないしそれらを煽る場となっている可能性。

⑦【個人化不安仮説】

「自分がどんな人間かわからなくなること」が「ある／たまにある／あまりない／ない／不明・無回答」とナショナリズム類型の関係（図表は省略）

・ドイツ、スウェーデン：「ある」者において「不満ナショナリズム」がやや多い。（ドイツ $p < 0.1$ 、スウェーデン $p < 0.05$ ）

・韓国：「ない」ほど「満足ナショナリズム」がやや多く、「ある」と「不満アンチナショナリズム」がやや多い。（ $p < 0.1$ ）

・日本、アメリカ：有意差なし

↓

国によっては個人化不安仮説がやや当てはまる場合もある。

5. まとめ

日韓の若者のナショナリズムは全体として高まっているわけではなく、現状に対する不満が排外的ナショナリズムをもたらしているわけでもないようだ。

日本について言えば、現状（特に自分の個人的な生活状況）に不満をもちながら文化や自然の面でナショナリズム意識を抱いている層の比率は（今回の対象国の中で）相対的にやや多い。しかし、雇用リスクがもたらす不満はナショナリズムではない方向に向かっているし、インターネット利用や個人化不安とナショナリズムが連動しているわけでもない。学歴についても、それが不利な層において不満をもちながらのナショナリズムにつながりがちな弱い傾向がみられるとはいえ、統計的に意味のある結果ではない。

一方、韓国については、自分個人というよりも国のあり方に不満をもちながらのナショナリズム意識をもつ者が4割を占め、対象国の中で突出して多い。その担い手となりやすいのはパートタイム就労者と学生、専門大学の出身者である。インターネットがそうした意識の土壌となっている様子もうかがえ、個人化がもたらす不安とも（弱い）関連しているようである。

今回の分析では「満足ナショナリズム」と「不満ナショナリズム」の「危険性」に関する相違は明らかではない。しかし、もし香山や大野が指摘するように「満足ナショナリズム」がより国際協動的で危険性が少なく、「不満ナショナリズム」がラディカルな排外に向かいやすいとすれば、「不満ナショナリズム」に対してより警戒する必要があるだろう。

その場合、日本については一部の若者の置かれている厳しい状況を改善すること、また韓国については同様の対策とともに、学生などが抱きやすい国内政治への「真面目な」不満に注目する必要があるだろう。

<参考文献>

- 石坂浩一、2002、「韓国人の日本観」同編『日韓「異文化交流」ウォッチング』社会評論社。
- 大野道夫、2003、「ナショナリズムの諸相」『モノグラフ・高校生 Vol.69 高校生からみた「日本」ーナショナルなものへの感覚ー』ベネッセ未来教育センター。
- 香山リカ、2002、『ぶちナショナリズム症候群』中央公論新社。
- 香山リカ、2004、『<私>の愛国心』筑摩書房。
- 北田暁大、2005、『嗤う日本の「ナショナリズム」』日本放送出版協会。
- 金明秀、2001、「高校生の抱くナショナリズム」尾嶋史章編『現代高校生の計量分析』ミネルヴァ書房。
- 高原基彰、2006、『不安型ナショナリズムの時代ー日韓中のネット世代が憎みあう本当の理由』洋泉社新書
- y.
- 平石直昭、2006、「現代日本の『ナショナリズム』ー何が問われているのかー」『社会科学研究』第58巻

第1号.

(参考) 表1 国別 ナショナリズム類型の規定要因 (多項ロジスティック回帰、ベースは「不満アンチ」)

		満足ナショナリズム	不満ナショナリズム	満足アンチ
日本	切片	-1.490	-.663	-1.456
	女性ダミー	.115	-.172	-.101
	パートタイムダミー	-.274	-.221	-.823*
	失業ダミー	-.207	.165	.149
	高等教育ダミー	.688*	.054	.533+
	ネット利用ダミー	-.637	-.341	-.429
	アイデンティティ不安ダミー	.046	-.031	-.093
	モデルの有意確率 CoxとSnell 疑似 R2 乗	0.345 0.037		
韓国	切片	1.260	2.336*	.320
	女性ダミー	-.492	-.110	-.754
	パートタイムダミー	.040	.432	.703
	失業ダミー	.168	.124	.536
	高等教育ダミー	.441	.736*	.052
	ネット利用ダミー	-.010	.510+	-.356
	アイデンティティ不安ダミー	-.294	-.301	-.324
	モデルの有意確率 CoxとSnell 疑似 R2 乗	0.125 0.069		
アメリカ	切片	.248	-.314	-.899
	女性ダミー	.012	-.626	.361
	パートタイムダミー	-.573	.126	-.630
	失業ダミー	-.890*	-.043	-.945+
	高等教育ダミー	-.112	-.226	-.910*
	ネット利用ダミー	-.050	-.073	-.077
	アイデンティティ不安ダミー	-.123	-.287	-.195
	モデルの有意確率 CoxとSnell 疑似 R2 乗	0.061 0.063		
スウェーデン	切片	.002	-.318	-.581
	女性ダミー	.441	.290	.438
	パートタイムダミー	-.698	-.515	-.774
	失業ダミー	-1.174**	-.285	-1.220*
	高等教育ダミー	.060	.085	.393
	ネット利用ダミー	-.320	-.005	-.489
	アイデンティティ不安ダミー	.104	.242	-.070
	モデルの有意確率 CoxとSnell 疑似 R2 乗	0.091 0.058		
ドイツ	切片	-16.850***	-15.740***	-.294
	女性ダミー	-.405	-.581*	.098
	パートタイムダミー	-.178	.077	.321
	失業ダミー	-.492	.187	.020
	高等教育ダミー	-	-	.159
	ネット利用ダミー	.074	.422+	-.484+
	アイデンティティ不安ダミー	.029	.212	-.213
	モデルの有意確率 CoxとSnell 疑似 R2 乗	0.041 0.053		

